

## 2004 年度を振り返って

---

J E P I X フォーラムも 2 年度を終えた。J E P I X フォーラム初年度は、J E P I X 開発の中心的な役割をされた国際基督教大学 ( I C U ) の宮崎修行教授が、J E P I X フォーラム代表として、先進的企業 1 3 社とともに J E P I X の実務への普及、展開を模索され大きな成果を残された。

J E P I X フォーラム 2 年度は、宮崎修行教授がスイス国立ザンクトガレン大学、経済環境研究所 ( I O e W ) 客員教授として 1 年間赴かれることより、私にその間の J E P I X フォーラムの取りまとめを依頼された。私は、J E P I X フォーラム初年度に参加していなかったが、J E P I X 報告書 ( 科学技術振興事業団 ( J S T ) 報告書「環境パフォーマンス評価係数 ( J E P I X ) 」) は読んでいた。このような統合化手法が確立され、容易に活用できることを望んでいた一人として、宮崎教授に思っているままをお伝えしていた。それが、一つのご縁で、J E P I X フォーラム 2 年度の取りまとめ役を依頼されたと考えている。

このような大役をお受けするのは、大変名誉なことであるが、どこまでご期待に添えるか自信もなかった。ただ、私は J E P I X の統合化をもっと簡単にパソコンのスプレッドシートを用いてできるのではと考えており、そのことについて宮崎教授に相談し、「積極的に推進するのが良い」とのアドバイスを受け、J E P I X フォーラム 2 年度は、J E P I X 簡易算出シートの開発、普及に重点を置くことで了解をいただき、お受けすることとした。

J E P I X フォーラム 2 年度を振り返って見ると、当初から J E P I X 簡易算出シートの開発、普及を考えていたが、当初は 2 年度からの新たな会員企業もいることより、J E P I X の基礎からの研修を行なった。その過程で、J E P I X の統合化係数を使用した結果が、各企業の環境担当者の感覚と合わないという意見が多く寄せられた。それらの意見に対応すべく、J E P I X フォーラムの会員企業の中から有志を募り、統合化係数 ( エコファクター ) について詳細な検討を J E P I X フォーラムの会合とは別に実施した。改訂するエコファクターは、実態とかけ離れたエコファクターと想定されるものおよび算出過程での計算式が論理的に不合理であるものに限定した。この改訂については、事前に宮崎教授の了解のもとで行ない、その結果、3 つのエコファクターの改訂を行なった。

なお、今回のエコファクターの改訂は、改訂後のエコファクターを使用した会員企業の環境負荷の状況を感覚的な面からの評価とほぼ一致しているとのことで概ね好評であった。本来的に、エコファクターは、ある環境負荷物質の日本における実際の年間排出量と、日本における規制目標としての年間排出量とから機械的に算定されるものであるが、いずれの年間排出量も現状では正確に算定することが困難であり、どうしても推定や仮定をおいて算定せざるを得ない現実がある。このような、過渡的な状況の中では、合理的な説明が見つかる範囲で試行錯誤的なエコファクターの算定もやむを得ないと考えている。

J E P I X簡易算出シートの開発も、3つのエコファクターの改訂により、順調に実施でき、J E P I Xフォーラム会員企業で試行的な活用が続けられた。その間、バグ情報については、その都度対応し、より利用勝手のよいものが、会員企業の尽力により作成することができたと考えている。さらに、J E P I X簡易算出シートをWeb上の3箇所のサイト（J E P I Xサイト、ICU国際基督教大学、あずさサステナビリティ株式会社）からダウンロードできるようにしており、現在も、一般企業からJ E P I X簡易算出シートのダウンロードが行なわれている。なお、この間の経緯については、産業環境管理協会の月刊誌「環境管理」の2005年4月号に掲載されている。また、本報告書にも同原稿が収められている。

J E P I Xフォーラムでは、会員企業によるJ E P I Xの活用事例が、各社から報告されたが、J E P I Xの活用が初年度よりも多面的に実施されていることが、本報告書からもご理解いただけると考える。それだけJ E P I X（統合化指標）の有効性が高いことが立証されつつあると認識している。なお、それらのJ E P I Xフォーラム会員企業による活用事例も本報告書に収められている。会員企業相互の情報交換により、さらなる有効な活用方法が開発され、またそれらが普及することによって、J E P I Xが持続可能な社会実現へのツールの一つとなれば、望外の喜びである。

J E P I Xの有効性については相当程度理解されつつあるが、他方、課題も残っている。これら課題への対処は、会員企業の有志によるボランティアで対応できるものでなく、組織的なJ E P I Xの見直し作業が必要と考えている。今後、宮崎修行教授が帰国され、本格的活動な活動の開始を心より期待している。また、そのために微力ながら協力できればと考えている。

最後に、J E P I Xフォーラム2年度を無事に終了できたのも、J E P I Xフォーラム参加企業の皆様の暖かいご支援のお蔭と心より感謝する。特にエコファクターの検討において、花王株式会社の山口広美氏、テルモ株式会社の中橋敬輔氏に化学の専門的な面で多大なご協力をいただいたことを重ねて御礼申し上げる。また、ドイツからメールにて適確なご指導、アドバイスをいただいた宮崎教授、さらに事務局としてJ E P I Xフォーラムの活動を支えていただいた株式会社山武の篠塚英一氏、後藤達也氏、水谷佳奈氏に心よりお礼を申し上げたい。

2005年6月17日

J E P I Xフォーラム座長代行  
あずさサステナビリティ株式会社  
代表取締役社長 魚住隆太  
(公認会計士、環境計量士)